

追悼

## 永安幸正先生を偲んで

永井 達彦

初めて永安先生にお会いしたのは、当時私が住んでおりました神戸に永安先生が講演会に来られた昭和六十年頃でした。講演の内容はよく覚えておりませんが、とにかくスケールの大きさが非常に印象的でした。

その後、永安先生に再会したのは平成十三年（西暦二〇〇一年）、研究部から研究センターに名称が変更し、私が研究センターに事務長として異動した時のセンター長が永安先生でした。当時の永安先生は非常に仕事に厳しい方でした。「今から私の言う英語をコンピュータに打ち込んで下さい。」「この手紙を国会議員全員に送って下さい。」「世界と日本のことを常に考えられていた永安先生から、我々が考えの及ばない仕事が起こる毎日です。毎日永安先生からどんな仕事をいただくか、緊張感のある毎日でした。それは苦しみと知的好奇心と言う楽しみが入り混じったもので、永安先生といっしょに仕事をした人へのみ経験できる独特の雰囲気でした。」

仕事には非常に厳しい永安先生でしたが、人一倍気配りがきく人間味のある先生でした。毎年タケノコのシーズンになると、「永井さん、私の家の玄関にタケノコをぶらさげておくから取りに来なさい。田舎で採

ってきたタケノコで、とつても新鮮でおいしいよ。」という電話を自宅にかけてこられました。また、非常に驚かされ感心させられたのは、永安先生がオフィスの台所にあつたコーヒーカップや湯のみを自ら洗っていらつしやつたことでした。

永安先生は麗澤大学の自分のゼミ生を助手として育てられました。濱君、多田君、栗山さん、木村君、古川君、数名のゼミ生が永安先生の助手を勤めました。そして編集作業の合間に永安先生直々の英語勉強会が始まります。「お前はそんなことも知らないのか。中学から英語をやり直せ。」永安先生の厳しい勉強会によって彼らはめきめき編集能力や英語力をつけて、インドの大学院や専攻塾に進学して行きました。

永安先生といつしよに仕事をさせていただいた七年間に、何回か今谷南町の自宅を訪問させていただきました。先生はロッキングチェアに座つて、政治、経済、モラロジー、いろんな話をして下さいました。地下室には約一万冊もの膨大な図書が所蔵されている書庫があり、先生の広範な知識の基になつた様々な分野の図書に驚かされました。永安先生の奥様が、「私は夫が本を買うことに一度もノーと言つたことがありません。」とおつしやつておられたことを覚えています。現在その蔵書は永安文庫として研究センターの書庫に収まっています。

研究センター書庫の永安文庫の隣に、多田顕文庫があります。多田顕先生は永安先生が懇意にされていた先生で、館山の多田顕先生の自宅へ永安先生といつしよに蔵書をいただきに行つたことがあります。いつも永安先生の車を運転されるのは奥様でした。多田顕先生の自宅は館山にある一軒家で、永安先生に負けず膨大な蔵書が自宅と納屋にありました。その蔵書のほとんどを永安先生の発案で研究センターにいただき、現在は永安文庫の隣に収まっています。多田顕先生の父上は、日本が満州国に関東軍を送つていた時の多田中

将だと永安先生からうかがいました。多田顕先生の自宅で、素晴らしい書を多田先生から見せていただきました。それはラストエンペラー溥儀から多田中将に贈られたもので、今まで見たことのない伸びやかな書に感動したことを覚えています。

永安先生は釣りが好きでした。奥様の運転で館山の方へよく釣りに行ってらっしゃったということを、ご本人からよく聞きました。時々でしたが平日のある日にも私のところへ「今日は、館山の方へ調査に行ってくる」というような電話を掛けてこられました。翌日永安先生の顔を拝見すると何となく日焼けされておられたので、多分釣りに行かれたような様子でした。私にも「君は釣りをするのか」と聞かれたことがありましたが、当時から私は菜食を目指していてあまり魚を食べなかつたので、永安先生と釣りをごいっしょすることはありませんでした。

永安先生が亡くなられる二ヶ月ほど前の平成十九年六月二十一日に、入院先の新東京病院にお見舞いに伺いました。先生は結構しんどそうな様子でしたが、二時間あまりお話をされました。特に『モラロジ―概論』を書くに当たったの様々な経緯について話されました。永安先生は沢山の著作を出されましたが、『モラロジ―概論』はその集大成であり、その執筆に命がけで取り組んだことをしみじみと語っておられたことを覚えています。

永安先生が亡くなられる前に次のような入院記録を付けていました。

平成十九年六月二十一日 永安先生入院 永井、新東京病院にお見舞い

六月二十七日 心臓の弁の手術

七月 十二日 麻酔が解けて永安先生から研究センターに電話有り

七月二十一日 病状のご報告

七月二十六日 永安先生より、八月中旬に退院して、その後谷川に行きますとの連絡有り

七月二十七日 永安先生より、来週別の弁の手術をする予定との連絡有り

八月 三日 永安先生の知り合いの松岡さんが『モラロジー概論』三冊を研究センターに

取りに来られ、新東京病院の永安先生へ届けて下さった。

八月 六日 永安先生より、入院が九月まで長引きそうとの連絡有り

八月 十一日 岩佐センター長がお見舞いに新東京病院を訪問。

「一人で横になれない、起こすのも助けが必要、風呂に行くのも一人で行けない、ぜい肉がついて、筋力が落ちていいる」との報告あり。

永安先生の一週忌にお墓参りをさせていただく機会がありました。永安先生のお墓は千葉県八千代市の八千代中央駅から徒歩で五分のところであり、花が咲き乱れた公園のような墓地でした。御影石やガラス製のオブジェのような墓石には、亡くなられた方の好きな言葉が刻まれていました。永安先生のお墓は一冊の本のオブジェに「虚往実帰」という言葉（空海）と、「右足一步 左足一步」の文字が刻まれた、とても素晴らしいお墓でした。

毎日研究センターの十誌あまりの新聞に目を通して気づいた記事をコピーされ、毎週沢山の図書を読まれ、毎日夜中に読書と執筆をして毎年数冊の著作を出版され、ゼミの学生を助手として育てておられた永安

先生が亡くなられたことは、研究センターの大きな損失でした。永安幸正先生、有難うございました。どうぞ安らかにお眠り下さい。